石神遺跡の調査（飛鳥藤原第116次）

石神遺跡は、斉明天皇の時代（655～661）に、異国や辺境の民への饗宴をおこなったり、客館として機能した場所と考えられています。現在、飛鳥資料館に展示している石人像と須弥山石は、明治時代にここから掘り出されたものです。

石神遺跡の調査風景

奈文研では、この遺跡を1981年から継続的に調査してきました。今回の調査は14回めにあたり、昨年度調査した東側の隣接地を約500㎡発掘しています。これまでではもっとも北に位置し、遺跡の北限を解明することが期待されます。

石神遺跡は、調査の難度という点では、飛鳥でも有数の遺跡です。遺構が複雑で重複が多いうえに、傾斜地に大規模な造営を何度も繰り返しているため、何層もの整地土が各時期ごとの遺構を覆い隠し、寸断しているのです。

そこで、遺構を検出しては整地土を一層除去し、また遺構を探す、という作業が必要となります。当然、整地土を除去できるのは遺構がない部分に限られますが、こうした作業を経て、少しずつ遺跡の状況が明らかになってきました。

昨年度の調査で石神遺跡の北限と考えた石組大溝は、今回の調査区を横断してさらに東へのびています。幅2.4m、深さ0.7m以上という立派なもので、これが北の端を区画する溝である可能性が高まりました。また、それとセットになって遺跡の北限を構

成する東西方向の掘立柱塀も、同様に東へつづいていきます。ただし、この石組大溝はある時期に埋められて、底に石を敷き詰めた幅0.9m、深さ 0.3m ほどの浅い石組溝に造り替えられていることが、あらたに判明しました。

北限に近い関係からか、建物の密度はさほど高くありません。調査区東南部で、大型の掘立柱建物1棟を確認している程度です。一方、遺物は大量に出土しており、とくに藤原宮期の溝からは膨大な量の土器が見つかりました。

発掘調査はまもなく佳境にはいり、9月後半から順次、遺構写真の撮影や平面実測などをおこなっていく予定です。　（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）